国際交流事後活動ニュース

MACROCOSM

マクロコズム '99.11

◎特 集　日韓青少年指導者等交流事業

vol.31

㈶青少年国際交流推進センター

▲ 青少年国際理解セミナーの全体会における基調発表
日本と韓国から２名ずつの代表者が行いました

▲ 分科会では、「今、私たちにできる交流とは」をテーマに自由に話し合いました

21世紀に向けて日韓の相互理解をどうすすめるか

◀ 歓迎交流会での楽しい一時
ここでホストファミリーに紹介され、2泊3日のホームステイに向かいました

▼ 日韓共同による大正琴の演奏が実現！

◀ ホストファミリーと共に
あっという間に過ぎてしまった2泊3日

歴史的にも文化的にも関係の深い日本と韓国が友好関係を増進させていくことは、両国のためのみならずアジア太平洋地域の発展のために不可欠です。両国の関係は、経済面での結びつきは強くあるものの、国民感情の面では、「近くて遠い国」という言葉がでることがあるように、相互理解と友好親善を増進していくためにより一層の努力が必要な状況にあるのも事実です。しかしながら、2002年のサッカーワールドカップ共同開催に向けて、互いに結びつこうとする新しい様々な動きがでてきています。特に、若い世代の自然な形での交流が進み始めていることは嬉しいかぎりです。

本事業は、平成7年の日韓国交正常化30周年を踏まえ、同じ問題意識を有する㈳韓国青少年交流振興協会と連携し、21世紀に向け、両国の将来を担う青年たちの相互理解と友好親善の促進を図るものとして実施しています。セミナーを含めてのプログラムは5回目となり、今年は青少年指導者を含めた12名の皆さんを招へいすることができました。

期　間：平成11年7月29日（木）～8月4日（水）　　場　所：東京都及び栃木県

SSEAYPインターナショナル第12回総会

1999年8月6日～10日　　於：シンガポール

◀ 来賓として、総務庁からの代表あいさつをする総務庁青少年対策本部駒形国際交流担当参事官

▲ 今年のSIGAでは、シンガポール同窓会設立20周年を記念して、SSEAYPインターナショナル・シンガポールから各国の功労者に表彰状が贈られました

SSEAYPインターナショナル事務局長としてあいさつするIYEO森田副会長 ▶

▲ 4つの分科会に分かれて具体的活動について話し合いました
コンピュータ・ネットワークについての分科会

▼ 会議終了後の市内視察より（マーライオン前）

韓日青少年交流の必要性と発展方法

權　純珠

現代の社会は速いスピードで変化しています。交通の発達および情報、通信体系の急速な発達で以前の時空間の概念が変りつつあります。地球村つまり全世界が一つの村と言えるような単一生活圏を成しています。小さな村が一生の生活圏だった「前近代社会」国家を生活圏とする「近代社会」を過ぎ、もう全世界が単一生活圏となる「脱近代社会」が急速に進んでいるのです。新しい世紀を迎えるこの時点で、自国の利益だけを考えては、つまり他国との交流を無くしては生きて行けないのです。世界化は国家の発展だけではなく個人にも必要なことにっています。強大国でも弱小国でも互いに協力しながら21世紀を迎えるべきだと思います。

もう全ての国は、距離上遠い国であっても一つの共同体として様々な交流を通して互いに理解深めようとしています。そしてアジアの主導国とも言える日本と韓国はさらに協力体制を固め、地球村の主役になるように努力する必要があるのではないでしょうか。2002年ワールドカップの共同開催に向かって、互いに自国の利益だけ考えるのではなく、協力し合い、アジアの力を見せるいい機会になって欲しいです。

日本と韓国の交流は最近のことではなく長い歴史をもっています。それで日本と韓国は見かけから生活習慣、言語などの文化的な側面で似ている部分が多いです。そのような点は、昨日国立博物館を見学して改めて感じられました。両国は過去の争いで遠くなり、今でも植民地時代を体験し、凄く反日感情をもっているお年寄りが多いです。それで日本と韓国は近い国なのにお互いよく知らないようです。しかし過去の間違った歴史があったため、「近くて遠い国」のまま続けるのは誰も望んでないと思います。そのためには、間違った歴史について正直に認め、今後そのような歴史が繰り返さないようにしなければ行けません。

実は、韓国の青少年は日本について関心が高いです。今まで韓国では文化的な側面でかなり閉鎖

主な内容

日韓青少年指導者等交流事業 ……5〜9
カナダへの旅 ……10〜12
（日系カナダ人の歴史）
電波に乗せて、IYEOをPR ……13
第12回SIGAに参加して ……14〜15
SSEAYPの意義 ……15
「第3回青年の船」30周年記念大会 …16〜17
出版社に転職して ……18
岐阜全国大会のご案内 ……19
お知らせページ（見てネ！） ……20

〈表紙の説明〉

第11回「世界青年の船」
栗田耕一 団員の作品より

「アカプルコで歓迎する
地元高校生」
（寄港地活動の歓迎式にて）

▲ 栃木県氏家町でのホストファミリーによる歓迎の出迎え

的でした。日本大衆文化の扇情性、暴力性などが問題になっています。今まで韓国では日本の映画や漫画、アニメ、音楽などが裏から入ってきましたが、金大中大統領が日本訪問の際、日本の大衆文化の受け入れを発表しました。それで今後韓国の青少年達は日本の文化に接する機会が多くなるでしょう。これからは互いの正しい文化共有が必要であり、異文化の理解や尊重、客観的な観点から世界を眺める力を養わなければならないと思います。そのためにはより活発な交流活動が要求されています。韓国の青少年達が日本を訪問し、日本の青少年達も韓国を訪問して互いの文化、歴史を理解しながら明るい未来を創って行くべきだと思います。

この前、日本と韓国が締結したワーキングホリデー（working holiday）ビザの協定はなにより喜ばしいものでした。ワーキングホリデービザというのはその言葉通り「仕事をしながら旅行および観光できるビザ」です。多くの国が自国の経済、労働環境を守るために外国人の就職に対する規制をする中で、外国人にも労働の機会を与えるワーキングホリデービザ協定は、両国政府の民間交流に対する努力の実りであり、これから理解の幅を広げ、友好増進を通して自国発展のためにも役に立つものになると思います。

この時点でより円滑な相互交流のためには互いの入国手続きをより簡単にする必要があると思います。日本人の韓国観光入国は、ビザ無しで可能だそうですが、韓国からの日本観光入国はそうではありません。私も今回ビザをとるのに長い時間が掛かりました。これからの日韓青少年交流を活発するために是非解決して頂きたいと思います。このような基盤の上、より活発な交流が行われる、また、その交流を通した両国青少年達の相互理解と問題解決は、より素晴らしい21世紀の地球村を創るのに大きく役に立つと思います。

そして、昨日総務庁青少年対策本部を訪問して日本の青少年問題と対策について説明を受けまし

◀ 栃木県青年国際交流機構手塚会長による歓迎のあいさつ

たが、その内容が私の国と大きく異なってないと改めて感じました。学校で勤務している私は、日本より少ないが、たんだん深刻になって行く青少年問題に多く関心があります。日本と韓国の青少年問題はほぼ同じです。暴力、薬物乱用、日本の「いじめ」と似ている「ワンター（Wangtta）」などが問題になっています。経済の崩れは、また復元する事が出来ますが、青少年が健全ではない社会はその未来が暗澹なもので不安なのです。だからこそ、青少年問題の解決し、明るい未来を創るために、青少年の文化交流とともに青少年指導者の交流を活性化する必要があると思います。青少年は、互いに影響をうけ易いため似ている悩みや問題をもっているのではないかと思います。このような青少年に良い影響を与えるように、また、青少年に健全な文化交流が行われるように、私を含めた青少年指導者たちが最善を尽すべきだと思います。

これからの日韓青年交流

金　聖凡

21世紀を目前にしているこの時点で日韓青少年交流に活気が溢れるようになったのは、非常にいいことだと思います。このような既存のセミナーでは、硬くて大きいテーマを取り上げ、発表した方が多いと思われますが、私はまだ学生という事で、自分が日頃思っていた日本のことや短い期間でしたが今回日本へ来てみて感じたことなどについて話したいと思います。

その前に、まず私たちが知っている日本について話したいと思います。教科書を通して接した日本と言う国は、36年間私たちの自由権を犯した国、私たちのお祖母さん、お祖父さんを困らせた国、暴力など教育的によくない海賊版のビデオテープや漫画があふれている国等のあまり良くないイメージをもっています。一方、TVなどマスメディアを通して、日本人は勤勉・誠実で親切な人であり、また日本ではリサイクルを実践していると聞きました。

▲ 少年と一緒にもちつきをする筆者

韓国のソウルを見ているような風景やあまり変わらない顔、それにもかかわらず互いによく知らないような感じがします。私が日本に着いた初日、成田空港に整然と並んでいる木やきれいな室内は、暑さを忘れさせてくれるようでした。バスに乗ってホテルへ向かう途中、韓国とは違う交通文化

（車の運転席が反対ということ）をみてここが日本だなと感じられました。

そして歓迎会の時、韓国の「ハンボク（韓服）」をみて、日本の人は「チマチョゴリ」と呼んでいました。実は「チョゴリ」というのは、全ての上着を指している言葉で、「チマ」と言うのは、女性がはくスカートを指している言葉です。日本の伝統的な衣装を「きもの」というように、韓国の伝統衣装は「ハンボク（韓服）」と言います。残念でしたので、直していただきたいと思います。

そして日本で滞在している間、私は驚いたことがあります。一つは、歓迎会が終わってから散歩でホテルの周辺を歩いていましたが、街で若者達が人の目を全然気にせず大胆な愛情表現をすること、もう一つは、TVを見ていると、韓国のテレビでは見られないいやらしい場面をそのまま放送していることです。やはり違う国だと思いました。

その後、国立博物館の見学のため歩いていたところ、上野公園に暑さを避けて来ているようなお祖母さん、お祖父さん、おじさん達を見ました。後で、その人達がホームレスであると聞いて驚きました。また食べる時ごとに感じるものですが、韓国でも良く食べているじゃが芋やお米、野菜等の料理が韓国とは全く違う味でした。（美味しかったのですが、キムチが欲しくなりました。）

このように今まで考えていた日本とは違う部分が多いと言うことが分かるようになりました。私たちが日本について知らない部分が多いと言う事は、あまりにも互いの交流が少なかったとも言えると思います。今後、両国の交流がより盛んになって欲しいです。

そうするために一つの問題を解決して頂きたいと思います。それはビザに関する問題ですが、私の場合、ビザをとりに直接日本領事館に行きましたが、手続きが複雑で難しいものでした。短期ビザなのに。今後の文化交流を活発にするためには、この問題の解決が必要だと思います。

現代は国際化・情報化の時代で、地球は一つの共同体になっています。日本と韓国が一つの共同体になるきっかけとして2002年のサッカーのワールドカップがあります。大学のサークルでもスポーツサークルや音楽サークル、演劇・映画サークルなどがあります。両国の青少年達が、まずスポーツや音楽、演劇・映画など興味あるところからたんだんに文化交流を進めて行けば、互いに理解しやすくなると思います。

ちなみに今回のような国際交流がそのままで終わることではなく、マスメディアの力を借りて、より一層たくさんの両国の人に知らせるとその効果は大きくなると思います。そうすれば日本と韓国の国際交流におよぶ影響もおおきくなるのではないでしょうか。お互い頑張りましょう。

日本・韓国、ファイト！

相互理解の大切さを改めて知らされた１週間

初日の７月29日。何回実施していても、韓国からの訪問団来日の第１日目は緊張する。それは、彼らの緊張した表情が想像できるからであり、今年も最後は握手で別れられますようにと願う心の裏返しでもある。日本との交流を望み進めてくれている人々を迎えるのに不思議に思われるであろうが、日本と韓国の間に未だ埋めきれないものがあることは否定しようもない。しかし、この交流を行っていると個人としての日本人と韓国人のお付き合いは近しいものになれることを確信できる。

二日目、総務庁青少年対策本部への表敬訪問と日本の青少年行政についてのレクチャーに、韓国訪問団のメンバーは真剣に耳を傾けていた。その後の国会議事堂、皇居では暑さにもかかわらず行動的で、初めての日本を記録に残そうと熱心にシャッターを切っていた。

三日目は、いよいよ公開セミナー開催。午前中の文化交流は、「ハンボック」や「浴衣」を着せあったり、互いの国の歌を覚えたりとこだわりのない自然な交流から入った。

セミナーでは、全体会よりも分科会を重視した時間配分で行ったが、通訳が入ることもあり、時間がもっと欲しいというのが大方の意見であった。

分科会で目指したことは、これからの交流についてであったが、グループによっては、過去の歴史論が長引き今後を充分に語れなかったところもあった。これは、韓国についてのセミナーの際は、どこでも繰り返されていることであり、避けて通れない事柄である。

その先へすすむためには、日本の青年が歴史事実を認識し、当時の日本の置かれた状況を正確に把握するとともに、日本が侵した過ちがどこにあったのかを認識して受け答えができるようになるかが最大のポイントであろう。

また、韓国側の参加者も、50年前の責任論をこうした交流の場で持ち出す際のスタンスを気をつけるべきだと思う。お互いの最大の願いは、韓国と日本の今後の発展であることを強く認識し、互いに話しやすいアプローチを考えたいものである。

不十分ながらも、思うことを話せたことで、特に若いメンバーの距離はすっかり近くなったようで、セミナー終了後は少しの時間も惜しいかのように街に連れ立っていった。

翌日は、最大の楽しみであるホームステイのために栃木県へ出発。栃木県青年国際交流機構の手塚会長の地元である氏家町で受入をしていただいた。氏家町の方々には、ホストファミリーを引き受けて下さったのはもちろん、町営バスを提供して下さるなどの様々な配慮をいただいた。最後は、僅か２泊３日のホームステイながら、日韓双方に涙を見せるメンバーがでる程別れを惜しんでいたとのことであった。

「日本滞在中に不思議なことは一杯あったけれど、日本人は決して恐くはなく優しい人達ばかりだった。」との言葉をもらって、少々複雑な思いを含みながらも「来年もこの交流が継続できるよう頑張りましょう。」と励まし合って別れの言葉を交わした。

㈶青少年国際交流推進センター事務局次長
大橋　玲子
（日本青年国際交流機構事務局長）

カナダへの旅

宮崎県青年国際交流機構副会長
荒武　千穂

平成11年8月1日から8日まで、兄嫁の親戚で、カナダのトロントに移住している栗田家を訪問し今まで知らなかった日系カナダ人の歴史を垣間見ました。彼らの辿った道程は平坦なものではなかったようです。栗田家を通して、日系カナダ人の足跡を辿ってみたいと思います。

1　栗田家の歴史

栗田夫妻は、大正の半ば頃カナダのバンクーバーに移住し、日系カナダ人であれば多くの方が経験したようないろいろな苦労をしたあと、6人の子供にも恵まれ平穏に暮らしていました。長女の章子は向学心旺盛だったので、カナダの高校を卒業した後、母親の実家である宮崎に行き、宮崎女子師範学校卒業後、延岡中学校の教師となりました。彼らの運命を狂わせたのは太平洋戦争でした。章子は戦争が始まったためカナダの両親の下へ帰れなくなったのです。

また、カナダに住んでいた栗田家も、苦しい生活を余儀なくされました。彼らは日本人ということで、スローケンという北部の強制収容所にいれられました。収容所の中には学校も食料品店もありますが、そこから外に出ることはできないし、ラジオ等も無いので情報もありません。そして、章子の消息もわからないまま数年を過ごすことになります。

よし子、愛子、文子は、バンクーバーに住んでいた時、通常の学校が終わった後、日本語学校に通ったので日本語をだいぶ覚えましたが、強制収容所では日本語を使うことができなかったので、忘れてしまったと話していました。一番下のピーターとその上のロイは、家の中で両親と話すときしか日本語を使わなかったので、姉たちほど上手ではありません。

戦争が終わった後、日系カナダ人は、ロッキー山脈より東に住むか日本に帰るかの選択を迫られました。ここで日本に帰った人もいたようですが、栗田家は残る方を選びました。

それからまた、一からの生活が始まりました。彼らの苦労は計り知れませんが、ロイから聞いた母親、ハツ子についての話しを記したいと思います。

ハツ子は、常日頃から子供たちに「いろいろな知識を身につけなさい。頭に身につけたものは誰にも盗むことはできないのだから。」と話していたそうです。そして、「教育はあなた達のためになるから、できるだけ教育を受けさせてあげたいとお母さんは思っている。」と言っていたそうです。カナダに移住して教育の大切さを身を持って感じていたのでしょう。

その後、ロイが事業に失敗して明日の生活にも困るような状態になった時、ハツ子は「あなたが失ったものは、お金だけでしょ。お金はすぐに取り戻せるよ。」と言ったそうです。ハツ子は、大変気丈な女性であったと思うし、また気丈でなければこのような時代を生き抜くことはできなかったであろうと思います。

太平洋戦争後、カナダに残った彼らは死に物狂いで働きました。そして、今日の財産を築いていったようです。

9年前に来た時も感じましたが日系2世は日本語を話し、考え方もちょっと日本人と似ているところがあります。しかし、3世になると日本語も話せませんし、全くのカナダ人です。いや、同じ2世でも、兄弟の上の方と下の方では、考え方の違いを感じます。栗田家の下の方になるピーターなどは、非常に合理的な考え方をしています。

様々な困難を乗り越えてきた彼らの様子を見るにつけ、日本人としての自分を見つめ直さずにはいられない気がします。

2　章子のこと

日本に留学して先生になった話しは前に述べましたが、その後の話をしたいと思います。

自分は元気でいることを両親に知らせたかったのに、その方法も無く、章子は一時途方に暮れていたそうです。祖母たちも、ハツ子の家族のことを心配していましたが、章子は明るく振る舞い、毎日学校に通っていたそうです。

延岡の西にある高千穂にアメリカ軍の飛行機が不時着した時、二人のアメリカ人が捕虜になり、その時は通訳も務めました、でも、近所の人は章子がスパイではないかという人もおり、その精神的苦痛が想像を絶します。

そして、1945年6月29日、いつものように学校に行っていた章子は、空襲警報を耳します。爆撃により校舎に火がつき、火を消そうと一生懸命な章子は、次に落ちてくる爆弾に気が付きませんでした。彼女は即死でした。

延岡の祖母は、章子の死をハツ子に知らせようとしましたが、その手段もないまま終戦を迎え、その後、延岡にきたアメリカの軍人にハツ子への手紙を託したそうです。章子から習ったたどたどしい英語で一生懸命お願いしたら、その軍人さんは快く引き受けてくれたそうです。手紙は、太平洋を越え、彼の両親の元を経てカナダのスローケンにいるハツ子の元に届けられました。家族が章子の死を知ったのは、半年も過ぎてからのことでした。章子の死後、数年してハツ子たちは延岡に帰り、骨の一部をトロントに持って帰ったそうです。

章子が勤務していた延岡中学校では、今でも6月29日に慰霊祭を行ってくれるので、延岡に住む兄嫁の両親（章子のいとこ）が出席しています。今回、章子の両親である松二、ハツ子、そして章子の墓参りをして、二度とこのようなことが起きないことを願いました。

3　カタカナ英語について

日系人にとって、カタカナ英語は理解しにくいと言っていました。彼らが日本に行った時、「ハリケーン」ということばを聞いたそうですが、「ハリ」は、針だと思うけれど、「ケーン」は何だろうと思ったそうです。ロイが想像力を働かせて、「それは「ヘリケーン」（ヘを強く発

音する）ではないか」と言ったそうです。英語の発音と日本語の発音は異なるし、日本語はそれぞれをはっきりと発音するので、違う言葉に聞こえるようです。

兄の家族がお世話になった文子は、兄嫁に「ハラディ」をとりなさい。」というので、なんのことかと思ったら「ホリディ」のことでした。でも日本人が「ホリディ」というと文子には、Holly Day（神聖な日）に聞こえてしまうようでした。

彼らは、日本人があまり外来語を使い過ぎると、日本語がなくなってしまうのではないかと心配していました。

4　日系人の日本語

日系人の日本語は明治時代のものなので、東京の親戚が来るまでカメラを日本語では写真機というと思っていたそうです。また、言葉の最後が「…ですのよ。」というのは、彼らの間でずっと使われてきたいいまわしかもしれません。彼らが日本語を使うのは、親戚が来たときと、母親の友人と話すときぐらいだと言っていましたが、日ごろ使わない日本語をキープしているのはたいしたものだと私は思います。

ただ、日本人と大きく違うと思うのは、失敗を恐れずに話していることです。よし子など、私たちがトロントいについたばかりの日、ロイの家で庭を見ていたら、「ここは自然がいっぱいで、スリがたくさん来ますのよ。」というから、みんなで顔を見合わせて「リス」のことじゃないの、なんて小さい声で言っていたら、「そうそうリスのことよ。」と笑いながら言っていました。その後、日本人の英語の話になったとき、「日本人は間違いを恐れるからいけないの、間違ったら私みたいに笑えばいいのよ。」と言っていたのが印象的でした。

5　日系人の考え方

滞在中、グレースが私たちは日本人と同じ顔をしているけれど、カナダ人だと言った言葉がとても心に残っています。彼女が見せてくれた日系３世の書いた記事には次のようなことが書いてありました。「日系２世（両親の世代）は日本人の顔をしているが、明治時代の日本語を使い、生活様式もカナダ人になっている。私（日系３世）が、日本に行き、電車に乗ったとき、最初皆私を日本人と思ったらしいが、英語しかしゃべれないのを見て皆びっくりしていた。私はカナダ人なのだ。」

グレースは、次のように説明してくれた。「オリンピックで日本が優勝すると、とてもうれしい。でもカナダが優勝してカナダ国旗が上がり、国歌が流れるとなんともいえない好い気分になります。」

日ごろ、自分が日本人であることなど、意識したこともありませんが、日系カナダ人にとって自分が何人であるかを意識することが、自己のアイデンティティを探ることだったのではないでしょうか。

旅を振り返り、カナダで感じたいろいろなことをこれからの人生に生かしていくことが、お世話になった方々に報いることになると思っているところです。

電波に乗せて、IYEOをPR

徳島県青年国際交流機構
都築　智子

今年の8月9日（月）午後7時過ぎ、地元FM局「FM眉山」の一室で収録が始まった。

今年、第12回「世界青年の船」に参加する新会員の藪田ひとみさんがパーソナリティを努めているラジオ番組を通して、我が「徳島県IYEO」をもっと広くいろいろな人たちに知ってもらうためのPR活動としてである。会長、事務局長、事務局次長、そして埼玉県からの特別参加会員を加えて5名での大所帯参加となった。

少々緊張気味の中で始まり、まず各々の自己紹介の後、IYEOとはどういう団体であるか簡単な説明をすることからスタートした。その後、各自が参加した事業とその中で何をしたか等を、失敗談なども交えながら詳しく語っていった。真面目な話しばかりでは話し手も聞き手も飽きてくるので、時には冗談も織りまぜながら（この頃には緊張もほぐれてきていた）参加していた時に流行っていた音楽も流していただきながらの、あっという間の1時間だった。もちろんパーソナリティの藪田さんに助けられながらであったが。

1時間という中で、事業への充分な説明ができたかということに自信は無いし、どの位の人が聞いてくれたくれたのかは分からないけれど、今までとは違う新しいIYEOのPR活動ができたことは大きな成果だったと思う。これからもいろいろな形で、総務庁青年国際交流事業やIYEOのPR活動に取り組んでいきたいと思う。

ちなみに、番組オン・エアは8月16日（月）午前11時45分から12時45分であった。誰か聞いてくれたかな？

▼ 左から二番目、筆者

第12回 SSEAYP International General Assembly（SIGA）に参加して

日本青年国際交流機構事務局次長
赤澤　美雪
（平成6年航空機派遣ジョルダン班）

初めて訪れたシンガポールはなかなか印象的だった。どこかロンドンヒースローに似たきれいで広いチャンギ空港。近代的なビルと計画的に開発されている緑の多い町並み。独立から34年。世界に飛躍しようとするエネルギーを感じる一方、人口的に整備されてしまっている町並みに少し退屈感を覚えた。その中で中華街やマレー街は、それぞれの民族の伝統と習慣が漂う人間くさい場所として印象に残った。

そんな印象も束の間。シンガポール同窓会のメンバーは、すべての「東南アジア青年の船」同窓会がもっている温かい雰囲気で参加者を迎えてくれた。

今回のSIGAは「東南アジア青年の船25回記念会議」と「Sailing into the New Millenium」という二つのサブタイトルが付けられ、「過去の成果を振り返り、未来に前進しよう」という意味合いが随所に感じられた。

過去の成果を振り返るプログラムで象徴的だったのは、一冊の冊子の配付と開会式に先立って行なわれた一つのプログラムである。参加者全員に配付されたカラー版の「WAVELENGTH」は、1974年から25年間にわたり、情熱を持って行われてきた同窓会活動やSSEAYP International（SI）の活動を様々な面から紹介していた。「Pre-SIGA Brief」では、同窓会のイニシアチブによって自主的に過去11年間にわたって開催されてきたSIGAの様子が紹介された。

未来を予想させる側面としては、本会議において積極的にコンピュータが使用された点である。新しく更新されたシンガポール同窓会のホームページと、この開会式に合わせて作られたSIのホームページは、同窓会間においてもコンピュータによる情報発信とコミュニケーションの可能性を示し、普及を促すものだったように思う。

シンガポール同窓会によって形成されていたSIGA実行委員会は、明確な役割分担がなされており、参考になる部分がたくさんあった。シンガポール同窓会元会長のフセインさんは会議議事録の責任者を務め、旅行会社勤務のテックさんは参加者のホテルでの宿泊や生活面に細やかな配慮をしていた。このように、各パートの責任者は30代後半以上の人が多く、それぞれが社会で学んで身につけた専門性をいかんなく発揮していた。また、各パートの責任者のもとに、それぞれの役割を静かに果している人が多く見受けられた。現在、社会の中枢を担う人がボランティア活動にも専念できる個人の実力と、それを許容することのできる社会環境をうらやましく思うとともに、良き先輩から多くを学ぼうとする若い世代の姿勢は見習うべきだと思う。

SIGAの良さというのは、各同窓会組織やSIがどのような活動をしているのかということを毎年120名以上集まる既参加青年に知ってもらい、共通認識を作り上げることができるということだろ

う。それと同時に、アセアン各国からの参加者が再会を喜び、各個人の中に生きつづけている「東南アジア青年の船」のプログラムをより多くの人と共有することができることが大きな魅力であると思う。今年は、ヴィエトナムとラオスからも1名ずつ参加者を迎えることができた。これからもこの大会が、参加者全員にASEAN各国と日本の多くの人に同胞意識を育み、21世紀にむかって互いに前進していくエネルギーを与え続けるものであったらいいなと思う。

SSEAYPの意義

日本青年国際交流機構幹事（国際担当）
平畑　玄洋
（第22回東南アジア青年の船）

「東南アジア青年の船」受入事業では知り得ない参加者の本音、各同窓会メンバーの要望が聞きたい」。SIGAに参加することで、船の全体像がハッキリとつかめるのではないか、というのがSIGAへの参加理由だった。

SIGAの分科会は、そんな私の目的を達成する手がかりとなった。

テーマは“SSEAYPの意義”。一通りのポイントを述べて終わりそうな予感がしたが、メンバーの一人が「プログラムの問題点を指摘した方が建設的だ」と指摘したことで、議論が白熱した。私が敢えて「参加青年が未熟なパフォーマンスで自国文化を紹介することに意味はあるのか」「船上のディスカッションでは、意見が対立するような政治・経済をテーマにしたほうが議論が盛り上がるのでは」と問題提起すると、インドネシアの参加青年から前者については「“にわか仕立て”には

違いないが、参加青年がまとまって一つのゴールを目指すという面では、十分に意義がある」という意見が聞かれた。後者に関しては「そろそろ政治・経済などを議論してもいい時期に来ている」と同調する意見が出た。

特に、後者の問い掛けに対して、政治問題にセンシティブなインドネシアの参加者から、同調する意見が聞かれたのは意外でもあり心強かった。

SIGAの分科会では、参加者個人の率直な意見が聞けるという点で、各国の同窓会代表メンバーによる定例の会議とは一味違う。分科会では各国の意見を集約する必要がないためだ。その分、それぞれの事業参加経験などに基づいた自由闊達な意見が出る。分科会単位で意見を集約させる必要はあっても、それは国を越えた青年としての意見となる。

SIGAでのこうした意見交換が、「東南アジア青年の船」事業に反映されることで、SIGAの存在意義が高まり、事業本体もより良いものになっていくだろう。SIGAや本体事業が青年にとって、より自由な意見交換の場となれば、両プログラムの相乗効果で参加青年主体の「建設的」な交流の場になっていくはずだ。

友情の輪を広げよう！

「第3回青年の船」が出航より30年となり、去る8月28日～30日で岐阜県にて30周年記念大会を開催しました。以前は東京を中心に同船会を開いてきましたが、地方での開催も意味あるものではということになり、沖縄や札幌、高知で集まってきました。

運営に携わる会員は大変であるけれど、参加者に喜んでもらいたいと一生懸命準備をし、出席者も旅行兼用の楽しみもあり、地方開催も地に足がついてきました。

今回の岐阜では、鵜飼見学、高山への観光というプランも組み入れて2年前より準備にはいり、家族も含めて138名の参加者を得て大盛会でした。若かった団員も家族を持ち、30年ぶりに顔を合わせたという団員も多く、年月の経過を感じました。管理部や教官の方も多数出席して下さり、嬉しいかぎりでした。

今大会で印象的なことが二つありました。一つは、ジュニアの参加です。子供たちが成長し、もうすぐ30年前の自分たちの年齢に近づいていて、その子供たちが参加だけではなく運営を手伝ってくれたこと。二つ目は、不幸にして亡くなってしまった仲間の遺族の方が出席して下さり、それを3回の仲間が何のためらいもなく輪の中に入れて大会を過ごしたことでした。

自分たちが体験し経験したことを、親として伝えるだけでなく一緒に行動していた仲間に語ってもらう教えてもらう子供たちの心の成長が楽しみです。今後、続くこの集まりに若い力が頼もしいものになりますし、家族の参加も増えてくると思います。それでこそ、第3回のテーマであった「友情の輪を広げよう」が生かされるのではないかと思います。

〔「第3回青年の船」30周年記念大会実行委員会〕

「日本の真ん中」岐阜へおんさいと、30周年記念岐阜大会を岐阜県5名、愛知県2名、三重県2名の実行委員で決行、心配していた天気も大会を待っていたかのように晴れ上がりました。3年前、勲2等旭日重光章の叙勲を受けられた小玉正任管理官、これまで6回全出席の吉岡雄一教官、是松玲子、椎野孝一、徳山廣美、新田文子、石川隆、竹村満子、岡野豊一、岩間邦子を初めとして138名の参加者を得て、7、10、15、20、25、28周年大会と毎回100名以上の参加で続いていた歴史に新たな輝かしいページを綴ることができました。

30年過ぎた今、これだけ多くの団員が集まるのは何が魅力だろうか。あの青春時代を分け合った「かいこ棚生活」の厳しさであろうか。

大会が始まり、皆輝き生き生きとし、話しに花が咲き料理に手をつける間を惜しみ、もっと時間が欲しいと大宴会が続き、式典終了後の第2部は鵜飼や花火で夜を過ごしました。2日目は、世界文化遺産である白川郷合掌村を散策し高山へ。楽しい時間はあっという間に過ぎてしまいました。

最後は、次回33回青森大会での再会を約束、草川一枝教官の指揮の下に全員輪になり「青少年対策本部」まで届けと「青年の船の歌」を会場割れんばかりに大合唱して30周年大会の幕を閉じました。　〔実行委員長　岐阜県　渡辺　幸信〕

私にとってのこの「青年の船」は、充実していた青春の集大成でありました。今や、お金さえあれば、自由に海外旅行のできる時代へと変化しましたが、当時はまだ稀であり、そんな時代に船での2か月を仲間と共に外国を訪問するという特殊な体験は貴重なものでした。集団の中での人間関係や海外体験は、その後の人生を変えたといっても過言ではなく、下船後、船で得た多くの宝物を大切にしながら、船での体験を地域の子供会やＰＴＡ活動、婦人会、生産者団体等の活動に役立ててきました。　〔愛知県　飯田喜美子〕

「やあ、お久しぶり。」「オオ！すっかり貫禄がついたなあ。」あちこちで再会を喜び合う笑顔の会話が弾む。みんな、30年前にタイムスリップ、輝く若人の顔になって、思い出話に花が咲き、それぞれの人生を語り合う。

たった53日間の船の旅が、30年の時を経て今なお続いているような込み上げる感動に皆酔っていた。　〔岐阜県　岩間　邦子〕

2泊3日の旅も終わり、今、ゆっくりと全国に散っていった友のことを想い、各地に深い友情で結ばれ私を受入れてくれる力強い友のいることを思うと、本当に素晴らしい経験をさせていただいたという感謝の気持ちで一杯です。30年前、あの晴海埠頭で「青年は地位や名誉でなく、感動を尊ぶものだ。」とはなされた言葉が、今鮮やかに甦り実感させられた友との再会でした。

〔三重県　片岡　恵子〕

30年の流れを振り返れば、7周年記念東京大会から始まり、10周年熱海、15周年東京、20周年沖縄、25周年札幌、28周年高知、そして今年の岐阜と、大会はいつも管理官を初め団員100人を超す集いとなり、互いに懐かしく、友好の輪は回を重ねる毎に一層育まれてきました。私も全ての大会に参加でき、また、28周年大会は、主催者としてさせていただきました。仕事上、また家庭においても、この「青年の船」の集いは皆の心の支えになっています。　〔高知県　竹村　満子〕

出版社に転職して

日韓青年親善交流既参加青年
大島　修一

「本は売れてない」と囁かれているが、私はそうは思っていない。毎日通勤電車の中で、OL・サラリーマンが熱心に小説やビジネス書を読んでいる姿をみかけるし、ナショナルチェーンいわれる大手書店や「Book Off」という本のディスカウントショップの出店がここの所相次いでいるからである。

現在私の主な仕事は、出版物を書店やコンビニ等に案内し、注文をもらいつつ、取次と呼ばれる複数の卸問屋と部数交渉をすることである。

新興出版社の場合、大手出版社と異なり、知名度がないために大抵苦戦する。それをカバーするには、何かこのジャンルには強いという確固たる実績がないと長くは生き残れない業界である。当社の場合、それは「タレント・アーティスト本」という分野であり、これまで「尾崎豊」「かとうれいこ」等の写真集や「泉谷しげる」「片岡鶴太郎」等の作品集を手がけてきた。

特に片岡鶴太郎氏の墨彩画は、ここ数年幅広い層から支持され、各地の個展会場でも連日大盛況である。昨年末には草津に彼自身の美術館を完成させるなど画家としての道も着実に歩み始めている。

これは本人が述べていたことだが、「絵を書こうと思ったきっかけは、『自分の中にいる腹の虫』が話しかけてきた」のだと言う。「絵を書き続けていくと、そのうち絵を書くことが目的ではなく、草花や魚貝を描くことによって、花のかたちや魚の顔が一つ一つ違うことにまざまざと気付かされ、絵をはじめる前より一段と、自然の風景や匂いに敏感になった」とも言われていた。「『腹の虫』は、このことを私に伝えたかったのだろうか」と。

私もせっかく出版社に転職したのだから、こだわりのある作品を世間に紹介してみたい。極端な言い方だが、こだわりのない出版社なんて何の意味もなさないと思うからである。

第１２回「世界青年の船」報告会

世界１６か国の外国青年１５０名との交流体験を、日本参加青年が様々なパフォーマンスや展示も交えて発表します。

日　時　：　平成１２年２月１１日（祝）　１３時～１６時３０分（予定）

会　場　：　国立オリンピック記念青少年総合センター
国際交流棟「国際会議室」

参加費　：　無　料

青少年国際交流事後活動推進大会
日本青年国際交流機構第15回全国大会
第６回青少年国際交流全国フォーラム

いまから　ここから　まん真ん中から

1．主　　催　　総務庁青少年対策本部、（財）青少年国際交流推進センター
日本青年国際交流機構、岐阜県青年国際交流機構

2．主　　管　　日本青年国際交流機構第15回全国大会岐阜大会実行委員会

3．期　　日　　平成１１年１２月４日（土）～５日（日）

4．会　　場　　岐阜ルネッサンスホテル
〒502-0817　岐阜市長良福光2695-2　　TEL:058-295-3100　　FAX:058-295-3200

5．参加費　　宿　泊　17,000円（学生14,000円、中学生以下10,000円）
非宿泊　10,000円

※オプショナルツアーは別途参加費必要
Ａコース「世界文化遺産白川郷の旅」6,000円（交通費、昼食代、含む）
Ｂコース「岐阜城と信長めぐり」　　1,000円（往復ロープウエイ代）

6．申込方法　　９月号で送付した振込用紙に必要事項を記入の上、参加費を振込んでください
ハガキ又はFAXによる場合は、振込用紙通信欄と同様の内容及び参加費支払日、支払方法を記入し下記、宿泊担当へ申込みください。
〒501-1183　岐阜市則松2-197 村山 芳郎　　TEL・FAX　058-239-9917

第25回青少年国際理解セミナー

「国際青年育成交流」「日中、日韓青年親善交流」帰国報告会

平成11年度の航空機による派遣事業の参加青年による帰国報告会が下記の日程で行われます。
総務庁青少年対策本部が行う青少年国際交流事業についての全体的説明コーナーもありますので、他の事業に興味のある方にも声をかけてあげて下さい。

日　時　：　2000年2月6日（日）　12:30 ～ 16:30 （予定）
会　場　：　国立オリンピック記念青少年総合センター　国際会議室
参加費　：　無　料
主な内容：　中国、韓国、ブラジル、チリ、デンマーク、エクアドル、フィンランド、ジンバブエ、タイをそれぞれ訪問した団員が持ち帰った品々の展示、写真展示、ビデオ上映、事業体験談発表、グループ別懇談等のプログラムが行われますので、気軽にご参加下さい。

申込み先：㈶青少年国際交流推進センター「セミナー係」までＦＡＸ又は葉書にてお申込み下さい。
当日参加も歓迎ですので、多くの方に広報下さいますようお願いします。
〒103-0013　東京都中央区日本橋人形町２－３５－１４　東京海苔会館６Ｆ
㈶青少年国際交流推進センター　セミナー係
TEL：０３－３２４９－０７６７　　FAX：０３－３６３９－２４３６

編集後記

今月号は、多くの方の様々な思いを綴った号になりました。各地から届く原稿を読む度に世界の広さと人の心のあたたかさを感じます。「毎号ちゃんと読んでますよ。」と言って声をかけて下さる方に出会うととても嬉しいもの。紙面にもう少し工夫をしたいと思っています。

＊本誌の年間講読をご希望の方は、㈶青少年国際交流推進センターまで葉書又はＦＡＸにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM（マクロコズム）　11月号　Vol.31　1999年11月1日発行（隔月発行）
編　集：マクロコズム編集委員会
発　行：財団法人　青少年国際交流推進センター
〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2－35－14
TEL　03－3249－0767
FAX　03－3639－2436
e-mail LDP04056@nifty.ne.jp
URL　http://www.iic.or.jp/iyeo
編集協力：総務庁青少年対策本部
日本青年国際交流機構
定　　価：198円（本体189円）
印 刷 所：株式会社　絢 文 社
TEL　03－3959－3960

1999年8月31日〔外国青年来日〕～ 9月9日〔出航〕

地方旅行

◀石川県（スペイン、アラブ首長国連邦）

宮城県（カナダ、南アフリカ、トルコ）▶

▶徳島県（オーストラリア、インド、セイシェル諸島）

▶岡山県（カタール、ペルー）

◀長崎県（バーレーン、ノルウェー、タンザニア）

▶静岡県（ベルギー、エジプト、メキシコ）

課題別視察

7分野8コースに分かれての課題別視察を実施しました。今年は、国際高齢者年ということで、第11回「世界青年の船」に引続き高齢者の方々が活躍するコースを組み入れるるともに、出発前に総務庁高齢者社会対策室の大林室長より基調講演をしていただきました。

高齢者ボランティアコース

▲ 井の頭自然文化園

▲ 東京港野鳥公園

◀ 生涯学習〔㈶モラロジー研究所〕

◀ 文化〔茶道／裏千家東京道場〕

▶ 教育〔新宿区立花園小学校〕